

---

# 魔法少女プリルラ

紺智次

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女プリルラ

### 【Nコード】

N3669Y

### 【作者名】

紺智次

### 【あらすじ】

魔法少女プリルラとは愛と正義の魔法少女である。しかしその正体とは…。

美少女の一切登場しない魔法少女の宴が今始まる。

## プロローグ(前書き)

いらしゃんせー。よかったら見てください。

## プロローグ

「ハアーハツハツハ！燃える！すべて燃えてしまえ！この帝王、ジャアック・ニコルソンの前にひれふすがいい！ハツハツハ！」  
炎に包まれる街。逃げ惑う人々は叫びを上げ、さながら地獄の光景だった。

このままでは住処を失い、難民と化した人々が郊外にドーナツツの輪を作ることになる。治安は乱れ、犯罪は増加、道徳は地に落ち、政治への不信は民衆を革命へとかきたて、終わらない血の連鎖をつむぐ事になってしまふ。そんな悪夢をこのまま黙って待っているわけにはいかない。人々の思いは一つだった。誰か、助けて。と。

「そこまでよ！ジャアック！」

天から光が差し込んだような声。人々は天を仰ぎ、それを見る。

空中に浮かぶ小さな体。穢れのない白の衣をまとい、スカートにはふんだんにフリルがあしらえられており腰元には大きなピンクのりボンが主張している。胸元を彩る宝石は今年の流行色を取り入れたブッチブランドの新作だ。あどけない顔に大きく愛らしい瞳。その瞳の奥に正義の炎が燃えている。その名は

「愛と正義の魔法少女プリルラ！ただいま到着！」

キメポーズ。人々から歓喜の声があがる。

「あらわれおつたなプリルラ…。今日こそ決着をつけてやるう」

「罪の無い人々を苦しめて！許さないんだから！」

「罪の無いだと？ふざけるな！こいつらのしたことを知らないといわせんぞ！望んでもいない開放を謡い、わが国に侵略してきた恥知らずどもが！息子はそのせいで殺されたんだぞ！貴様らにあおられた反体制派によつてなぶり殺しだ！あれほど民衆に愛された男がその手にかかつて殺されるとは…。いまや息子は歴史に残る大虐殺者となっている。息子の汚名はかならず晴らす。貴様らを根絶やしにして、歴史を変えてやる」

「んー…よくわかんないよ。あー！！あの店お気に入りだったのに燃えちゃってる！！」

「おい…。せっかく重要そうな話してんるんだから聞いてやれよ…」  
「あ、タ又原さん」

タ又原さんはプリルラをサポートする動物型妖精だ。握りこぶしほどのサイズで、武器に変身する能力がある。ちなみに犬型である。そのほかに猫型のマイケル、鳥型のホルス神などがいる。

「おのれプリルラ！わしを愚弄しおって！くらえ黒い炎（Get it on）！」

ジャアツクの手から黒い炎が放たれる。ひらりとよけるプリルラ。

「うわ！あぶない！あー！！髪がちょっと焦げてる！…もー怒ったよ！タ又原さん！」

「あいよ」

タ又原さんがひかり、やがて一振りの杖になった。

「いくよー！マジカルマジック！ファイアー！」

ファイアーと呼ばれたそれは火の玉とは形容しがたく、見るものはみな太陽を思い浮かべる。万一操作を誤って地表に落としてしまうとあたり一体が小規模の恒星と化してしまうので敵を葬り次第、手で消さなくてはならない難儀な技だった。

高速で迫る太陽、避けるのは困難だ

「クソ」

叫び声は途中で掻き消えた。

後に残るものは何も無い、まさしく必殺技だ。

「やっつけたかな！？」

「それより先にファイアーを消せ！ファイアーなんて軽々しいものじゃないんだからな！早く消せ！」

「わかったよー。ほい消えた」

地表すれすれでファイアーは消えた。

「うーん。いないねー。やっつけたかな！」

「あれをくらうと消滅するからな」

きよろきよろとビー玉でも探すようにあたりを見回す。しかしジャアックの姿は見えない。

「おのれプリルラ…」

「…！ジャアック！どこにいるの！でてきなさい！」  
不意に声があったが姿は見えない。

「くう…この化け物め…。全力をもって逃げ出したがしばらくは戦えまい…。しかし覚えておけよ！わしはまた戻ってくる！何度でもな！」

ハハハと笑い声が遠くに消えていく。逃げ出したくせに笑われるとはなんとも釈然としない気持ちになったがいつものパターンなので気にしないことにした。

ふと気づくと人々が歓声を上げている。街を救ったプリルラを称えているのだ。

「ほらなんか答えてやれ」

タ又原さんが言う。気恥ずかしいがキメポーズで歓声に答えた。さらに高鳴る歓声。

「ハハハ…。アイドルみたいだね…。ちょっと恥ずかしいな。写真もいっぱい撮られてるし。うわすごい！天体観測するみたいなカメラだ！」

「まあ街を救った英雄なんだ。これくらいは当然じゃないか？とりあえず愛想をふりまいとけ。あとスカート押さえたほうがいいと思っぞ」

「？なんで？」

「…いやなんでもない。俺は疲れたから帰るぜ…」  
ポンと煙を残してタ又原さんは消えた。

「私も帰る。明日の宿題まだやってないんだよね…。魔法少女もつらいのよね…。みんなー！ありがとー！またジャアックが来てもやつつけるから安心してねー！じゃーねー！」

プリルラは人々に手を振り続けながら飛んでいった。その小さい後姿に人々はいつまでも惜しみない拍手と、嵐のような歓声を浴びせ

るのだった。愛と正義の魔法少女。彼女はいついかなるときでも人々のために戦う、正義の体現者である。

フィードアウトしていく映像。そして文字が浮かび上がる。

「提供 三ツ藤工業株式会社

制作 MOD HOUSE」

スローテンポの緩やかな曲が始まりスタッフフロールが流れだしたところで画面が黒に染まり目の前に男の姿が移った。後退した髪際がさびしいどこにでもいる中年。そう自分だ。だらしなく開いた口元を閉じリモコンを持っている男に話しかける。

「なんですかこれ？」

「プロローグです」

## 簡単なお仕事

ビルとビルの上に溶け込むように建っている目立たない雑居ビル。その三階。扉の前に「ナカマル・エンターテイメント」と書かれた看板がぶら下がっている。小さいながらこぎれいにまとまっている応接間には男 中年が一人。目の前にはテレビ。ついさっきまで数十年ぶりのテレビアニメーションを見ていた。

準備してきますので、このビデオ見ておいてくださいねえ。お仕事の紹介になりますのでえ

妙に腰をくねらせながらその男はテレビのスイッチを入れて出て行った。画面の向こうで少女が飛び跳ね、敵を倒す。絵の動きは良くなっても構成は大して変わらないんだなと男は思った。はたしてそれは業界の怠慢か、視聴者の質の低下か。何故自分はこんなところにいるんだろう。疑問が男の脳みそを侵略している。あれはそう、求人情報誌。求人情報誌の広告の一つだった。数日前、男は警察を退職していた。無職になり仕事を探すため、とりあえず無料の求人情報誌を手に取り手当たりしだいに電話していた。面接にこぎつけたものもあつたが、職に結びつく事はなかった。

そんなあるとき、情報誌の片隅にそれがあつた。

「簡単な警備のお仕事募集！」

「明るく楽しい職場！」

「こんなにたくさん!? お給料何に使おう？」

「職場でこんなにたくさん友達ができました！」

「応募要項

- ・ 18歳以上の男女
- ・ 火器、銃器取り扱い経験のある方
- ・ 過去5年間通院経験の無い方



- ・警察官、自衛官経験者優遇
- 「以下の方はご応募できません」
- ・持病、精神疾患を患っている方
- ・四肢のいずれかが欠損している方
- ・薬物経験のある方
- ・窃盗癖のある方
- ・出身地が日本ではない方

最初の文と最後の文の雰囲気が違うように気がしたが気にしないようにした。

最後に書かれていた給与面も申し分なく、とにかくすぐにも仕事欲しかった男はすぐに電話した。「ナカマル・エンターテイメント」の名前が出たときは掛け間違いかと思ったがどうやら会っていらしい。トントン拍子で面接が決まりここにいたる。

正直、ここに来る前から嫌な予感はしていた。面接には行かない事も考えたが、断りの電話を入れるようなほど今の自分にゆとりがあるはずもなく、不安を飲み込んでここに赴いた。が、さっきのアニメを見ている途中で自分の予感は信用に足る事がわかった。

仕事の詳しい内容も

「詳しい仕事内容は面接でお話します！お気軽にお越しください！」

の一文で片付けられており、警備以外に何をするのか分からない。正直もう帰りたいたいと思っていた。

「おまたせしましたー！」

勢いよく扉を上げ男が入ってくる。

「お待たせしてごめんなさいねえ？何分社員が私一人なもので。許して長宗我部元親！なんちゃって！」

「はあ」

どうやら退路は絶たれたらしい。

「んもお、つれないわねえ。まあいいわじゃあ面接始めましょうか、そちらの席にお座りくださあい」

「はい。よろしく願います」

指された席に座る。机をはさんで右手90度横に男が座った。

「ええと、名刺はさつきわたしたわよね？中丸憲一です、よろしく。ナカマル・エンターテイメントの社長でえす。ええーと猪口真司さん？38歳求職中…と。あら！自衛隊から警察行ってるのねえ、すごいわ。最終職歴は警視庁捜査一課。ドラマみたいねえ！ふふふ、失礼。高校卒業後、自衛隊に入隊：えー2年後：任期満了で警視庁に入ったのね。うんうん。自衛隊での所属はなにかしら？」

「はい、陸自です」

「まあステキ！それじゃあ火器の取り扱いの問題ないわねえ。警視庁はどうしておやめになったの？」

「ええ…まあ捜査上の不祥事といったところです…はい」

「あら…そう。大変ねえ猪口さん。まあウチは能力主義？て方針だから前歴は気にしないわよお。安心して頂戴！」

「はあ…ありがとうございます」

中丸は「うんうん」と頷きながら履歴書を眺めている。やがて履歴書をいきおいよく机に置き猪口の方へ顔を向けた。

「はい結構ですう。問題ないようなのでこちらの書類にサインお願いします」

「…え？」

目の前にぼんと置かれた書類。『氏名』の欄を指で叩きながら中丸がそう言った。上部に主張するように『雇用契約書』と書かれていた。

「…あのすいませんちょっとよろしいですか」

「あらなにかしら？どうぞ」

「これって合格ってことでしょうか？」

「ええそうですよお」

「……………」

もうなにから質問すればいいのやらわからない猪口は目の前の雇用契約書に目を落とした。

給与、待遇、どれも問題なし。むしろこれほど貰えるのか疑わしい金額ですらあった。契約書に明記している以上支払われる金額なのだろう。しかし何かがおかしい…。いやすべてがおかしいのでどうすればいいのかわからないのが現実だった。

そうだ仕事内容。

肝心の仕事について何も聞いていない。こんなことも忘れるほど猪は混乱していた。

「あのもう一つ」

「んもう。くだい男はもてないわよお」

「……………」。仕事内容について教えてください。まだ何も聞いてないのですが……………」

「え？猪口さんさつきビデオ見ましたわよねえ？」

「はい」

「あれが仕事内容です」

「……………」

猪口の顔を一言表現すると梅干だろつ。

目を硬くつむり、眉間にしわ寄せ、口は横一文字、頭痛をごまかし、額に指を当てる。

もともと猪口は温和な性格とはいえなかった。いわゆる『たたき上げ』のタイプで、昔ながらの頑固親父といったところだった。面接でなかったら怒鳴っていただろう。

どうにか平静を取り戻して猪口はまた尋ねた。

「いや…あの、無学で申し訳ないのですがもう少し具体的にお教えいただけますか？」

こめかみをひくつかせながら恐ろしい笑顔で猪口は言った。

「うーん、そうねえ…簡単に言つと……………」

中丸はしばらく考え込んで、やがて思いついたのか明るい顔を。それは見事な笑顔を。猪口に向けてこう言った。

「魔法少女になって警備をする簡単なお仕事です！」

猪口はまた梅干になった。

簡単なお仕事 2 (前書き)

創作はむずかしいわあ。

## 簡単なお仕事 2

M・T・S (Mitsufuji Transform System)。その昔、三ツ藤重工が開発した子供向けおもちゃ、『変身するんです』の宣伝文句である。約50年前、当時の三ツ藤製作所(現三ツ藤重工)は軍需を扱っており、瞬間装着可能なボディーアーマーの開発をしていた。非戦闘状態から戦闘状態へのスムーズシフトをコンセプトに試作機を完成させた。手に収まるサイズの機械で、装置を起動させれば瞬時に武装体勢になる変身ユニットである。その際につけられたコードがM・T・Sである。しかしこの試作機は失敗となる。防弾繊維のケプラーとの相性が悪く、うまく変化しなかったのだ。また、銃火器の構造も変化してしまい使い物にならなかった。当時の三ツ藤は小さな下請け会社で資金面が潤沢とはいえなかった。そこでM・T・Sを子供の変身セットに流用したものが『変身するんです』だった。

改良の結果、子供向けの遊びなら実用に耐えられる程度に安定し、完成品を販売。これが大ヒットとなり三ツ藤は名を上げることになる。

「そして今から十年前。なんと今度は体組織を変化させる変身ユニットを開発しちゃったってわけね。猪口さんもご存知でしょ？」

当時、テレビ、ラジオ、あらゆるメディアではその事だらけだった。いままでの服装のみの変身に比べて今度は『本当』に変身してしまうのだから。まるでアニメの中の魔法少女のように。

連日テレビの中でコメンテーター達が議論していたのをうっすら覚えてる。愚にも付かない内容だったとも。

そしてその三年後、三ツ藤はこの変身ユニットを完成。システムをM・i・n・T・S (Mitsufuji Immunity and naturalization Transform System)とし、商品化。『ミント』の商品名で発売。日本のみ

ならず世界中の注目を集めた。三ツ藤重工になったのもこのあたりだ。

「そして現在、日本軍需産業の三割を占めるほどになった大企業に成長した三ツ藤はM・i・n・T・Sの成功と同時に相模湾沖約200キロメートル沖に超巨大埋立地を建設。まあこれは国と共同での建設だけどねえ。群馬の約三分の一？ぐらいなのよねえ。建前は三ツ藤の工場群を置くためのものだけど実際は住宅、商店、役所、病院なんでもござれ。一つの都市として機能しているわねえ。一応の完成は二年前に終わっているけど今直拡大中。名目上、神奈川県に属する埋立地なんだけどこの企画が開始されたときからみんな言ってた『海上都市』ってのが通名よねえ。ここまではご存知よね？」

「ええまあ……」

「実は三ツ藤の役人とあたしは知り合いでねえ、ちよくちよくお仕事回してもらってんのよお。今回もその口でなのよ」

「はあ」

「警備の仕事ですって。広告をかねての。猪口さんに今回お願いするのこれね。海上都市の学園んだけど二ツ桜学園ってご存知？」  
「ああ確かあの都市最初にできた学園だと覚えとります。なかなか優秀な進学校のようにすな」

「つけたすと、中高一貫のお嬢様学校ねえ。女子校なのよ、あそこ」

「はあ、それでその学校が何か……？」

「警備の場所」

「ん？」

「だから警備の場所。仕事場よ？」

「ああ、施設警備ということですか、なるほど」

施設警備。いままでの不安が消えていくような響きだ。なんてまともな職業なのだろう。猪口は無理にそう思い込もうとしていた。

そう、まだ『魔法少女』の話が出てきていないの。先ほどから視界の端に例のアニメのポスターが映りこんでくる。ポスターの中で少

女は笑っていた。

「そう。広告を兼ねての、ね？先ほど見たアニメ、あれ実は三ツ藤の新製品のプロモーションビデオなのよ。もともとは兵隊さん用の武装システムだったじゃない？うまくいかなかったけど。それが今回完成したらしいのよ。それでまあ、広告を出すにあたってなぜかアニメ、しかも魔法少女になっちゃたらしいのよね。ほんとお偉いさんは何考えるかわからないわあ…。」

「そ・れ・で。アニメの主人公が実際街を歩いてたら結構インパクトあるでしょ？そんな感じで実際に変身してもらって学園生活を送ってもらおうってこと。これだけでだいぶ宣伝になるのよ。そのついでに施設警備もしてもらおうってこと」

「基本的なお仕事はプリルラちゃんになって学園生活を過ごしつつの学園警備ね。その間こちらの用意したイベントもこなしてもらおうけどまあ難しいものじゃないから大丈夫よ？期間は半年。成績によって社員登用になります。そのへん契約書に書いてあるから、はんこ押した後読んでくださいねえ。じゃあ、ここに名前とはんこね？」

「ずい、と出された契約書を猪口は裏返す。」

「いやいやいやいや。ちょっと待ってください」

「何よ、まだ何か質問？」

「……………えー、その…」

猪口はくしゃくしゃの顔を下に向けた。たるんだ腹が見えた。悲しくなった。どうしようも悲しくなった。やっと仕事に就けると思ったらこの様である。

猪口は一応常識人として人生を過ごしてきたつもりだ。大人としての責任も果たしてきたつもりだ。警察を辞めたのも猪口の不始末というわけではなかった。だが社会とはそういうものなのだ。羊が必要なきが出てくる。猪口もそれをわかってるから黙って辞表を提



出した。それがこの年になって『魔法少女』。しかも学園生活。職を選ぶつもりなど無かったし、あるていどキツイ仕事になるだろうとも思っていた。が、これはあんまりではないか。

「ねえ猪口さん」

猪口の渋面をみて中丸が声をかける。先生が生徒を諭すような声だった。

「仕事…みつからないのよね？」

その通り。まさに凶星をつかれ、猪口はハッと顔を上げる。中丸が目を細め猪口を見ていた。

「猪口さん…よく考えてみて？ たった半年よ？ 半年我慢するだけで社員への道が開かれてるのよ？ そりゃあその歳で魔法少女って言われても戸惑うのはわかるわ…でも！ ここであきらめてこの先どうするの！？ 正直に言いますよ！ 40手前の中年を雇うところなんてないわよ！？ 仮に仕事が見つかったとしましょう！ それは誰もやらないような過酷な肉体労働でしょうね。その割りに給料はすずめの涙程度。楽しみといたら帰宅後にワンカップを空ける程度がせいぜい関の山！ 老いていく体に合わない肉体労働…。一体何年続くでしょう？ 十年？ 二十年？ その間楽しみといた楽しみもなく仕事場と家の往復作業！ やがて働けなくなつたあなたは簡単に切られるわ！ そして動かなくなつた体はベットから出る事もかなわず畳の『シミ』となりあなたは消えていくのよ！ 誰からも省みられる事も無く！ そんな人生を送りたいの！？ 猪口さん！」

「あ…ああ…」

中丸の迫力に猪口は飲まれてしまった。

「猪口さん！ これはチャンスなのよ！？ しかも最後のチャンス！ これを生かさないとどうするの？ お給料も申し分ないはず！ 生きるか死ぬかの瀬戸際よ！ 迷う余地なんて無いはず！ いいえ迷う事すら愚かだわ！」

中丸はそつと手を重ねる

「さあ…契約書にサインをしましょう？」

猪口真司の名前の横に押印がされた。

じゃあ明日一通り器具の使い方など説明するので10時に来てくださいねえ

中丸は最後にそう言って猪口を帰らせた。

家に帰る途中、猪口は夕日を眺めながら歩いていた。次々と過去の思い出が思い出された。

（俺がガキの頃は宇宙刑事キャシャンとか観てたっけな…。親父が買ってきた『変身するんです』がキャシャンじゃなくてギャバーンだったんもんで散々泣き喚いたこともあったなあ）

思い出とは時として心を麻痺させる麻薬になりうるのである。猪口の心はまさに麻薬を欲していた。しかしそれを意識できない猪口は、思い出の濁流の正体に気づかず、物欲的な麻薬を欲する。

（コンビニか…）

家の近くのコンビニである。

（なにはともあれ仕事が決まったんだ。祝い酒でも買っていこう）  
自動ドアを通り抜けかごを取り、適当につまみを放り投げる。飲酒類の棚の前に立つ。ワンカップに目が留まり手を伸ばす。がいつもは手を出さないプレミアムヴォルツをその手は掴んだ。

## 御園未来(前書き)

メルちゃんのイメージはちびつたで。ちびつたでお願いします。

## 御園未来

景色がゆつくりと止まる。到着したようだ。車内アナウンスが流れ乗客は次々に降りていく。

この海上都の駅は大分特殊で、空港のような厳重な検査がある。また初めて来る人間に対しては検査があり、簡単な診察と予防接種を行わなければならない。検査費用は新幹線の運賃に含まれるため割高である。メルは仕事のため本来持ち込めない、輸出入規制品（ミントは本来軍事用なのでこれにあたる）があるため、事前に用意してもらった三ツ藤の押印がでかかど押された荷物リストと特別通行証で荷物検査はスムーズに済んだ。検査検査は全員受けなければいけないので30分缶詰になった。

「年のわりに血圧が高いですね」  
偽造されたメルのパスポートを見て医師はそういった。

とくに持病を患っているわけでもなく、なんなく最後の予防接種までコマを進めた。

「それじゃあそこにつつぶせになってください」

「つつぶせですか？」

注射をするのになぜつつぶせになるのだろうと猪口は訝しんだ。

「首の後ろにスタンプしますので」

「スタンプ？はんこ注射ですか？」

「まあそんなものです」

言われるままにつつ伏せになる。注射といえ腕にするぐらいしか想像できない猪口にとっては未知の体験に対する恐れが渦巻いていた。もともと注射が嫌いでもある。

「それじゃあ二回刺します。チクツとしますが痛みはほとんどありませんので安心してください」

「…お願いします」

それは首というより後頭部だった。何かの機械を押し当てられた後

一瞬、熱が走った。

「ハイ次いきます」

どうやら今のが一回目だったようだ。すぐに首の後ろをチクツとされた。おそらく八本ほどの針。まさしくはんこ注射を思い出した。

「ハイ結構です。検査は以上になります。これが切符ですのでいつもやってるように改札に通してください」

そういうと、追い出されるように診察室を追い出された。

切符を握り締め猪口は改札の前に立つ。

（まさか今になってここに立っているととはな…）

猪口はかぶりを振って改札に切符を流した。

「向こうでは案内役兼あなたのパートナーになる人間が先に到着しているので駅に着いたら会えるよう手配しとくわね。名前は…」

大野一、41歳。身長168cm、体重84kg。趣味釣り、とくに川釣り。好物は鮎の塩焼き。今回応募した動機はアニメが好きだから。最近面白かったアニメはもちろんプリルラ、好きなキャラは御園未来。私の人生において決定的な分岐点といえる作品は人生と呼ばれるかの名作クラ

（なんなんだこのしょうもない情報は…）

中丸から渡された資料には延々とそのような事が書かれていた。肝心な容姿などの情報は一切書いていない。

（自己紹介…？）

小学校の頃に書かされた自己紹介用紙を思い出した。

カッカッカッ

途方にくれ梅干になっていった猪口は、その高く鳴る靴音を聴いた。目をやると一人の少女が歩いてくる。黒く長いロングヘアを風になびかせ、背筋をピンと張り頭は一定の高さを保ちながら凜と歩くその少女の足はまっすぐ猪口に向かっていった。

カッ！と音を鳴らして猪口の目の前に立ち止まり、少女は涼しげな

瞳で猪口を見つめる。

整った顔にやや高い鼻、透き通るような白い肌を見て猪口は将来美人になるな、と思った。

「あのお…なにか？」

猪口はドモリながら声をかける。まだ自分の声に慣れていないからだ。

「虹野さん」

「はい？」

「虹野メルさんね」

「ああ、もしかして案内役の大野さ…」

「御園です」

「はい？」

「案内役の御園未来です。よろしく虹野さん」

「……………。あのお…一ついいですか？」

「どうぞ虹野さん」

「あなたは中丸エンターテイメント所属の」

「ええ」

「大野…」

「御園です」

「……………」

どうやらこの御園と名乗る少女が大野一のようにだった。おそらくミントで変身しているのだろう。

普段、猪口が生活していた社会ではここで名刺の一つでも交換して軽い談笑でもするのだろうが、目の前の少女（大野一41歳）が名刺を取り出すようなそぶりは一切無い。どうしていいのかわからない猪口に対し、少女は懐に手を入れ、なぜか櫛を取り出した。

猪口が不思議な顔をしていると、少女は猪口の後ろに回りこみ、髪をとき始めた。

「髪が乱れているわ虹野さん」

やわらかく、なでるようなくしの使い方。ふわふわと頭をなでる手

が心地よい。いや、よく考えたら気持ち悪い。

「ねえ虹野さん」

「…はい」

「髪が乱れてるって言う意味、わかるかしら？」

「？」

「私たちは女性として、身だしなみには気をつけなければいけない。ということよ」

つまり、私情を挟まず仕事に徹しろ、という意味だろうか。虹野メルになりきれというメツセージだろうか。一先輩として仕事の心得を教えてくれているのだろうか。

さまざまな考えが猪口の頭を駆け巡る。そうだ…自分は仕事に来ているんだ。ここまで来た以上放棄する事は許されない。やるしかないんだ。猪口は大野の助言をありがたく受け入れる事にした。

「あの、ありがとうございます！大野さ…」

「御園」

「…御園さん」

「どういたしましたして虹野さん。ではそろそろ行きましようか。今日からあなたの家になる学園の寮に案内します。疲れているでしょうから街中の案内は後日でいいでしょう。ああそれから…」

御園は一冊の本を差し出してきた。魔法少女プリルラと書かれている。どうやら漫画版のようだ。

「資料になるからと社長が渡しておいてくれて」

「あ…ありがとうございます」

漫画を受け取り数ページをパラパラめくってみる。あるページが目飛び込んだ。主人公メルと学園の先輩である御園未来が初めて出会うシーンである。学園で迷っているメルに御園は声をかける。緊張を和らげるため髪をとかしながら話をするシーンだ。脇に付箋が張っており小さく「読者の間でも評価の高いシーン！」と書かれていた。

淡いトーンのほのぼのしたシーンとは裏腹に猪口はずっしりと腹に鉛を詰め込まれた気分になった。

「さあ行きましょう」

先を歩く大野の姿は何かを成し遂げたような軽やかな足取りであった。



## 二ツ桜学園

駅から少し歩くとまた駅があった。どうやらこの都市の独立した私鉄であり、主な長距離用の移動手段だそうだ。あとはバスなどがこまごま動いているが、遠出などする際はほぼこの電車に乗るらしい。後で聞いた話では電車ではなく、モノレールらしい。が、猪口には区別が付かなかった。

電車に揺られる事30分。学園前の駅に降りてバスに乗ること10分。とうとう二ツ桜学園の校章「違い二つ桜」を見ることができた。なぜ猪口が興味も無い校章の名前を知っていたのかというと道中、延々と御園がしゃべっていたからだ。毛ほども興味が無かったので話の9割は相槌で済ませていた。が、つい口が滑ってしまった。

「いまだき戦国時代のような家紋なんて必要なんですかね？」  
それについて御園は

「あつたほうが素敵でしょ」  
なにが素敵なのか理解できなかった。

校門をくぐると猪口は思わず唸りをあげた。白塗りの壁は透き通るように美しく、整備された芝生はみずみずしい生命力に満ちている。中世ヨーロッパのような古風さを残しつつ現代風にアレンジされた建物の数々は見るものに新鮮な驚きを与え、極限まで高められた整合性は威圧感すら持っていた。

「むう……。さすが名門校。作りが違いますな。隙間風吹きすさぶ我が母校とは比べ物にならない」

「わざわざ高名な建築家を何人も呼び寄せて立てたんですから当然よ。それと虹野さん。しゃべり方がひどいわ。なおしなさい。」

「へえ……。努力してるんですがこれがどうにも……」

「言い訳はやめなさい」

「はい……。大野さ……」

「御園」

「御園さんは大変じゃありませんでしたか？」

「そうね…。はじめて敵と戦ったときは苦労したわ…。なにせいきなり魔法少女になってくれですもの」

何か話がへんなベクトルに働いている気がする。

「…ええとつまりこんな格好させられて大変じゃありませんでしたかという意味なんですが…」

「虹野さん」

「はい」

「何を言っているのかよくわからないわ。こんな格好も何もこれが私たちの制服よ？長旅で少し疲れてるのかしら。今日はもう寮で休んだほうがいいわ」

「……………そうですね」

猪口がここ数日で上達した事は諦めの早さだ。

「ただね虹野さん、一つ言っておくと最初の敵を倒すと世界が変わって見えるようになるわ。自信がつくといってもいい。とりあえず今は休みなさい。それとこのまえケロちゃんと言ってたわ。次の敵襲が来週の土曜日にあるって。それまでに準備をしないといけないわ」

「ケロちゃん…敵襲…」

おそらく、業務連絡があったのだろう。来週の土曜日に仕事。多分イベント。プロモーションイベントかなんかだろう。

会話の流れから意味を類推する力もだいぶ鍛えられてしまったようだ。まったくうれしくなかったが。

「じゃあ寮に案内するわ。ついてきてちょうだい」

そう言つと御園はさっさと歩き出した。スカートから生える長い足がカツカツと音を立てて遠ざかる。

揺れる黒髪を追いかけて猪口は駆け出した。

学園と寮は同じ敷地内にあるのだが、生徒

の間では半ば共通認識として彫刻のある噴水から通路を挟んで学園側と寮側というぐあいに分かれているらしい。そのほかにも細々としたテリトリーが存在するらしいが、もちろん猪口は聞いていない。今、猪口はその彫刻の前についていた。女性が顔を覆って跪いてる。学園の近代的な建築様式の風景に溶け込まず浮いて見えるその彫刻には名前が無いらしい。

この学園には他にもいろいろな芸術品がおかれている。そのどれも有名な芸術家のもので、作られた本人の名前やタイトルが付随しているのが常である。だがこの彫刻だけは名前が無かった。製作者の名前も作品の題名も。作った彫刻家は完成品だけ送りつけ、一つ「一切の表記（題名、作者名等）を禁ずる」という指示をしていた。学園側ではどうする事もできず、仕方無しに名無しで設置される事になった。

跪いて嘆いているその姿を生徒たちはただ「女神」とか「天使」と呼んでいるらしい。おおむね女神と呼んでいるらしかった。だれが呼び始めたのかは誰も知らないし、なぜ女神なのかも知らない。だが皮肉のような名前を持つこの彫刻はまさしく「女神」であった。なぜかそう思った。

女神を通り抜け猪口は寮の前に立った。案外、過剰な装飾はされていないシンプルな建物だ。屋内も無駄なインテリアなどは無く機能美に特化したような印象に好感が持てた。また、このシンプルさが逆にこの建物の気品であるように思えた。

東西と北、三つに分かれている寮の西側、三階建ての三階角部屋が猪口の部屋だった。西館は一年生、東館は二年生、北館は三年生の寮という風に分かれていた。互いの館は二階の連絡通路により繋がれており自由に行き来できる。

三階に上り、猪口はようやく部屋につく事ができた。気づかないうちに緊張していたらしく、疲れが猪口を襲った。

荷物をベットのの上に放り投げ、自身も一緒に飛び込む。毛布の暖かさにくるまれ猪口は意識の階段を下りていった。遠くで御園が何か言っているような気がしたが体中の力が抜けていき、猪口の脳は考える事をやめた。

## 魔女の槌

体が浮き上がるような感覚。猪口の意識が目覚め始めた。はじめに触覚が覚醒する。何か生暖かいものが感じられた。そうまるで人肌のような。体中をぬくもりが包んでいる。次に嗅覚が覚醒。何か良い匂いがした。母親の胸の中に抱かれていた頃のような甘い匂い。淡いミルクのおいだ。まどろみの中、半分覚醒していない脳みそは夢と現の幸福なときを過ごした。

聴覚、味覚、そして最後に視覚が覚醒し始める。

「ん〜」

まぶたが重い。まるで夢から逃さないとでも言うように、重い。だが、しかし。五感が戻り、ほぼ覚醒した猪口の意識は最後の砦を叩く。意識とは常に外界に向き、外界に出ようと働く。まぶたはそれでも現実に戻さぬために、甘い夢に閉じ込めるために、懸命に瞳を閉ざす。光とは現実を形作る最も邪悪な夢の天敵であり、まぶたはその光を遮り、現実を形作らせない夢の最後の砦なのだ。つまりすべての体組織の中でまぶただけが内向的であり反人間的とも言える。他の組織は外向的であるといえる。

まぶたへの攻撃は烈火のごとく激しくなる。人の人生の中で2万から3万回行われるこの戦闘は、結局のところまぶたの決壊で終わるのだ。

そんなわけのわからない事を猪口が考えているのは夢から覚める前のあいまいな状態にあるからである。猪口はたまに、このあいまいな状態を意識する事ができた。簡単に言うと金縛りのようなものなのだ。金縛りと違うのは意識が内面に向いているということ。まず最初に感じるのは単語の羅列。その大部分は眠りに着く前に体験した事柄や考えた事の関連的な単語であり、それらの単語が超高速で流れていくのだ。大きな単語でできた川が頭の中に流れているようなこの現象を猪口は「デフラグ中」と名付けている。そして「デフ

ラグ中」から意識が完全に覚醒するわずかな間。その刹那ほどの時間。猪口はこの超高速で働く脳を使う事ができるのだ。とっても考える事が超高速になるだけなので、ポアンカレ予想を証明するなど本来の猪口の知識以上の思考はできないのであまり意味はない。それにまさしく刹那の時間しか使えないので役に立つとはいえなかった。しかし、猪口は「デフラグ中」から覚醒するまでの瞬間を「シャイニング」と呼んで、けっこう楽しんでいた。そうするうちに完全に覚醒した脳はまぶたをぶち破り外界の景色を教えてくれる。

ぼやけた世界に見えたのは肌色。肌色の壁だ。

「ん…」

なにかが頭の奥で鳴っている。鼻をくすぐるミルクの匂い。体を包む人肌のぬくもり。しかし五感はそれを「異常」と判断し「アラート」を鳴らしている。おそらくこれが第六感だと猪口は思った。

一度目をつむり、思いっきり目を開ける。色と輪郭の戻った世界で猪口が最初に見たものは御園未来だった。

「えっ。なにやってるんですか」

自分でも驚くほどの「素」の状態だった。生まれたての赤ん坊がしゃべったのならこんなトーンなのだろう。そんなわけではない。

猪口の問いは「なぜ同じベットで寝ているのか」という意味と「なぜ全裸なのか」という二つの意味がある。猪口は自分の体を見た。

問いは「なぜ自分は全裸なのか」という三つの意味に増えた。

「んん…」

御園はわざとらしく（実際わざとだろう）色のある声をだした。流れるような黒髪が腰まで絡みつき、髪の間から覗く白い肌が宝石のように輝いている。美少女なのでそれなりに絵になっているのだが何故だか猪口はイラついた。

「いやいや。人の布団でなにしてるんですか」

「ん…。だってメルちゃん服着たまま寝ちゃったから…窮屈だと思つて…」

「いや、え？」

「メルちゃんが無防備な寝顔みてたら私も眠くなっちゃって…。いつのまにか眠っていたみたいね」

「いやいやいや。おかしいでしょ」

「なにがかしら」

「全裸はおかしいですよね」

「……まあ。そうかしら。寝るときは大体裸だけど…。胸とか崩れちゃうでしょ？」

あきらめの早さはいまや達人の領域の猪口は眉間を押さえながら言った。

「…とりあえず部屋に帰ってください。今日は休みたいんです」

「もうまだ寝ぼけてるの？」

「？」

「私の部屋ここでしょ」

ワーオ。猪口が言ったのか、どこから聞こえてきたのか。しかし確実にその言葉は響きわたった。ワーオ。

「こ…ここはおれ…私の部屋じゃ…」

「相部屋でしょ。ケロちゃんから聞いてないのかしら？」

ケロちゃんからはもちろん何も聞いていない。というよりケロちゃんが何なのか猪口は知らない。猪口が知っているのは御園の中身の趣味が釣りという事くらいだ。

猪口は全裸のまま床にへたり込んでしまった。

「まあ。おなかでもすいたの？ご飯でも食べましょうか」

ご飯と聞いて、猪口は時間になり時計を見る。夜8時を回ったばかりだった。

御園がベットから起き上がり服を着始める。それをみて猪口ものろとバツクへ向かう。

「それとねメルちゃん」

半裸の美少女が話しかけてくる。

「ケロちゃんからあまり詳しい事聞いてないみたいだからとりあえ

ず重要な事だけ伝えておくわ。私たち魔法少女は常に魔女になる危険性をはらんでいるの」

「魔女ですか」

「そう、私たちは巨大な魔力を与えられているわ。だけどキャパシティを超えた魔力は精神の暴走を招き、最終的には魔女になってしまうの」

「暴走ですか」

猪口は適当な相槌をうった。

「私たちの魔法はケロちゃん管理下におかれているの。彼がメインサーバーみたいなものね。魔女になった魔法少女はすぐにケロちゃんによって処分されるわ。万が一生き延びたとしてもそのときは残りの魔法少女総出で『魔女狩り』が始まる。どのみち魔女と化した者に生き残る道は無いの」

「魔女狩りですか」

「私は参加したことが無いからわからないけどね。何年前には実際祭りが開催されたらしいわ。ケロちゃんから聞いた話だけどね。」

まさに『血の饗宴』とのことよ。気分のいいものじゃないわ仲間を殺すなんて」

「怖いですね」

「これを渡しておくわ」

御園は本を渡してきた。過剰に装飾された表紙が厳しい。

「なんですか？」

「『魔法の槌』よ。原典の訳を書き換える事によって魔術素は大分減っているわ。それでも私たち魔法少女にとっては毒になりうる物。取り扱いには注意して頂戴」

細心の注意を持ってパラパラめくってみる。

「それと噂だけど、魔女になる危険性の高い魔法少女は言動に顕著な特徴が見られるらしいわ。たとえば少女に似つかわしくない中年男性のような行動をとったり…ね」

「こ…これは」



猪口は飛び込んできた文字によって目を焼かれた。  
つまり、『内部監査評価項目一覧』。ワーオ。

魔女の槌（後書き）

やっと次回から学園パート（地獄篇）がはじまるよ。  
c k i t o u t ! ! y o u a r e n o t g o o i n g  
a n y w h e r e ! ! g o c h e

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3669y/>

---

魔法少女プリルラ

2012年1月10日01時47分発行